

ざいそう

中国への関心

山下 祐一



最近、私は中国への関心が次第に高くなっている。昨年8月に行われた北京オリンピックは開会式の派手な演出から始まり、中国はメダルもたくさん取って注目された。これで新興国としても立派にオリンピックを開催できたことは今後の先進諸国に近づいていく証なのだろうか。ただオリンピックを前にチベット族のダライラマ14世の独立の抗議も話題となり、多くの少数民族が住む国としても注目を浴びた。でもこんなに中国への関心が高くなったのはオリンピックの開催国になっただけではなく、最近特に経済発展が目覚ましいことによるものではないだろうか。とうとう中国の外貨準備高も日本を抜いて2兆ドル近くになり、世界一の外貨の保有国になった。

これは中国が社会主義市場経済へ舵を切ったことがその理由といわれている。競争原理の働かない共産主義では生活が楽ではなく、資本主義経済に移行して工業化を進め、経済発展の道を歩み出したのである。おかげで私有財産制も取り入れられ、働いた分だけ給料がもらえるとなると競争力もついてきた。最初は労働集約的な工場から始まったが、最近はかなり技術力も向上してきた。1990年代は日本がトップで、それに韓国・台湾が続く、中国はそれに遅れをとっていた。それが最近、中国は韓国・台湾に肉薄してくると共に、一部には中国の方が優位な製品も出てきたようである。それにトップを走っていた日本もうかうかしていると追いつかれるところまで中国は技術的にも迫ってきている。

ところが、今年アメリカでサブプライム・ローンによる金融危機が発生した。サブプライム・ローンの問題は最初それほど問題なく終わると思っていたものが、9月になるとリーマン・ブラザーズが経営破たんし、これまでアメリカの金融工学を駆使して時代を謳歌していた投資銀行がすべて消滅するという大きな問題に発展した。おかげで世界が金融危機に陥り、最初は金融問題だけであったものが、次第に世界経済への景気に影響するようになり、景気減速が言われるようになった。日本でも経済後退は車やデパートなどの売上げにも直接影響を及ぼしはじめ、私達の生活にも関係してきたのである。

そんな中で、昨年10月に中国山東省の6社の工場企業を訪問する機会があった。そのうちの1つの会社である山東墨龍石油機械という会社を紹介する。この会社は石油掘削に使われるシームレスパイプを作っている会社で、広い工場がいくつもあり、パイプを作る作業もかなり自動化されていた。お陰で工場見学といいながらゴルフ場を回るくらいたくさん歩かされた。日本の住友金属には技術的にはまだまだ差があるということであったが、それでも半年先まで仕事一杯で、2010年に工場を新しく作る予定を1年早めて完成させるという計画とのことであった。このように、資源の開発はこれからも必要で、必要とされる製品はまだまだ需要があり、今後の伸びも期待される。このほかにも訪問した会社は活気のある会社が目白押しであった。

また、オリンピック後中国は公共投資を中心とした内需拡大を行うと聞いていたが、とうとう昨年11月9日に2010年末までに4兆元、日本円にして57兆円の財政政策を行うと中国政府が発表した。特に、道路や鉄道のインフラ整備、5月12日に発生した四川地震の復興など優先的に実施する。ここで建設機械の話をするが、これまでも住宅団地や工業団地の整備、道路や鉄道の建設と建設機械の売れ行きは大変なものであった。建設機械は需要に対して供給が追いつかず、建設機械が足りない状況が続いている。昨年の初めから中国に輸出する日本製の建設機械が間に合わず、アメリカ向けに建設機械は作ったものの需要がないため、その分を中国に振り向けた話を聞いたことがある。

中国は日本の20～30年前の経済状態あるいは社会資本整備状態といわれている。今後中国が内需拡大を図り、社会資本整備を充実する方向であれば、私達の中国への見方も変える必要があるのではないだろうか。今後アメリカやヨーロッパの力が落ちて、これからはアジアの時代といわれている。そんな中で中国が日本の社会資本に近づいて、技術的にも日本に追いついてくるとしたら、どう行動をしたらよいか考えることが必要になってきたと思うのは私だけであろうか。